

## 近代中国における pancreas の受容について

松本 秀士<sup>1,2)</sup>, 坂井 建雄<sup>2)</sup><sup>1)</sup>立教大学文学部 文学科文芸・思想専修, <sup>2)</sup>順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学

今日、膵臓は臓器の一つと捉えられているが、中国伝統の医学で論じられてきた五臓六腑の体系上では、必ずしもこれに対応する概念は明確ではない。中国伝統の医学で論じられる「脾」は、pancreas (膵臓) の概念を含むものであるという見方、あるいは中国伝統の諸医書にみるいわゆる「臟腑図」の変遷を焦点にして、pancreas と見られる構造物の描かれ方について論じた論考はみられるが、近代中国において西洋解剖学の指す pancreas の伝播については、未だ明らかではない。本発表では、これを焦点に、中国語解剖学用語の変遷から検討したい。

はじめに、中国伝統の医学における流れを振り返ると、明代に編纂された複数の医書に「脂漫」、あるいは「脂膜」を記した「臟腑図」がみられ、これは位置的に pancreas を表したと見る論考がある。しかし、それらの「臟腑図」では「脂漫」、あるいは「脂膜」に関する明確な記述がみられない。『本草綱目』(李, 1578) では「臟腑図」は描かれませんが、左右の腎臓の中央に位置する構造物として、「[月臣]」(偏は「肉月」、旁は「頤」の偏から構成される漢字で、音は yi。以下同様) が説明される。清代に入ると『医林改錯』(王, 1830) に掲載される「臟腑図」に「総提」(この部位は当時、一般に「胰子」と呼称する旨も述べられる)、ないしは「水道」が描かれ、これらは pancreas と断定する見方が多いが、描写・記述に不正確な面が多々あることも否めない。

次に、中国における西洋解剖学の伝播についてみたい。西洋医学の本格的伝播に先駆けて、西洋解剖学について概説した教養書『全体新論』(ホブソン, 1851) に、pancreas に関する記述がみられ、その中国語訳を「甜肉」としている。「甜肉」が具体的にどのような作用を持つかについては不明としており、作用不明の甘味を有する液体を分泌する器官である旨の記述がみられるが、周囲との構造的関係は必ずしも明確に伝えていない。

中国においてはじめての解剖学の専門書である『全体闡微』(オスグッド, 1881) は、はじめて中国語解剖学用語の標準化の役割を担った書であるが、pancreas に対しては『全体新論』を参照したとみられ「甜肉」を解剖学用語に定めている。その構造が分泌液を分泌する gland (腺) の集まりである旨、および周辺との構造的繋がりが詳述されている。次に、同書の不備を校訂する意図で編訳された『全体通考』(1886, ダッジョン) では、「胰」を pancreas の訳語としており、前出の『医林改錯』を参照したとみられる。解剖学的記述については『全体闡微』とほぼ同様である。

中国において二度目の中国語解剖学用語標準化の役割を担った『体学新編』(ホイットニー, 1904) では、「臟腑図」に曖昧に描かれる「脂漫」ではなく、『本草綱目』で論じられる「[月臣]」の語を採用するとともに、pancreas の構造が gland (腺) の集まりである旨を反映させて「[月臣] 腺」を新たに中国語解剖学用語と定めている。ここで用いられる「腺」は日本の『医範提綱』(1805, 宇田川) による造語以来の漢字とされ、『体学新編』において日本の解剖学書が参照されたことが伺われる。

しかし、『体学新編』において用いられた「腺」の扱いを詳しくみると、導管を有する gland に限定しており、導管を有さない gland については、別の中国語解剖学用語として「[木月骨]」(「核」の異字体) を定めており、日本のそれと大きく異なる。

「膵臓」(「脾」は『医範提綱』による造語以来とされる) および他のいくつかの和製解剖学用語は、『新内経』(丁, 1908) 等により中国に伝えられたが、民国期に入った直後に排除された。